



伴勢物證拾穂抄

上

特別
イ 4
3163
202(b)



貴
14
3163
202(1)

伊勢物語拾遺抄一

い世物語りハ伊勢乃はれ是作せり山ノ龍号を
 かくつりとのと程を根源流るるく決一難きなり
 定家卿乃は奥之り又此を故ハは物しり子謙退
 比真乃詞とく并しよむざりなれどもとあり奇乃
 事ハきりざりなれどもさうさうさうさうさうさう
 ころ事ありそしる早下乃河をれはづり乃と作
 乃とす也又心中乃秘密とく二条后りまじり
 秋宮より逢せりし事ありをさるるさうさうさう
 ころ乃事他人乃推さるるさうさうさうさうさう
 業平初乃自託あり也是と定家卿の如く此の類上上朱菴
 院乃護持乃業平乃自守の伊勢物語とくさうさう



114

とあるを也 石胆法師神祇考の巻 志うれども此物かゝりの神

了仁乃帝の芥河乃約まれ事ありとありいらひ

此身ひくはれ事見乃約平の多きなり且又此物

治葉平乃奇の介るゆへに可葉集乃奇なりとあり

とあり何れかあるは可葉集を呼ぶくはれ物也

とありありは事いふありひくはれ日記の介るあり

かすは事いふ人乃は後なりとあり葉平乃日記の双

成るなりなり伊集りてなり事とありなりは物也

とありなりなり院乃在宮七条乃をいふ海子乃は

なりなりなり決せり 一条殿乃愚兄御社母代の月以御環葉軒の

葉平の平城なりなりは保親なりなりは伊集り

とあり天長二年なりなり生れありなり

とあり天長二年なりなり生れありなり

同三年の保親と表をいふなり在在原朝臣乃姓なり

より三代實録よりなり陽成院乃元暦元年の志近

推中將なり在在原なりなり故在在原中將なり

惟清抄に因幡系といふなり葉集れ事也家三系皆門乃

南なる倉乃ありなりなりなりなりなりなり

より明が明がなりなりなりなりなりなりなり

六葉集よりなりなりなりなりなりなりなり

石上乃在原寺也玉葉集よりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

鴨長門の明抄云。わ身乃初し伊勢物語には撰乃多代初を
まねぶこ

まゝふ小引去乃多身りりけてさ味あゝゝの世
乃初りるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

順徳院中記云伊勢物語の初はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝ奇跡あり

網抄抄云詠奇大概も古今伊勢物語には撰松達をまゝお
まゝ也古今乃次り伊勢物語をのせゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おどりて始めるよむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いおろ一とつ斤ハ悪思お乃成。月ハ月開抄。清ハ惟法
お。言ハ網抄お。法抄開抄。初ハ初ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひりやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

年をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

伏犠氏之王天下也とくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

内河のり女史史教あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

愚業竹えおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

名也武義所よりあり
ま日野もあまの

とあんないばはうい
かりか。

一といひまゝに
いひやうしやうとあり
あまのよみてやう

逸早しえき後月満す
天福本定家抄勅物
河原左大臣寄也左大臣源融寛平七年
八月廿五日薨七十三於在中將惟義也
如何

愚業そよりあ後の内信有世の世の
はわでまゝなりきまゝなりや
次なる白きまゝなりきまゝなり
以下乃註乃心思見抄と惟信有
の作者は信乃信をのたり
信乃信平は時五は
乃并より用ひて面白き
乃乃大信 寛平七年
先を乃信をれを
とて發せしむる
中よりいふまゝなり
四つハ四の
師

れすも童平乃より多し
彼今ののりより多し
此は中将惟義を
か後乃信を
とをまゝなり
ちりりといふまゝなり
ひいんといふまゝなり
やうある心も
第也天福本
所もいばは
れずといふまゝなり
又青岡惟信
月ひといふまゝなり
とらんまゝなり
やうなるまゝなり
書平のまゝなり
さひん云
る白きまゝなり

ま
うらたわんか
あゆるしし戸金
むねのひらこ
影たれおろし
はらりたるん

おらさくさくつれ入られたるわんか
そらきつて何の國までい
り寄罷し書平のさへ人
は況し又あへく
とくさく思ひいんと
秋くさくうらちとね
ことし次の初め
いさくさくさく
せうこさく見せ
乃さくさく
えりさくさく
まゆるさくさく
うらたわんか
あゆるしし戸金
むねのひらこ
影たれおろし
はらりたるん

おれのさくさくさく
さくさくさくさく

うらたわんか
あゆるしし戸金
むねのひらこ
影たれおろし
はらりたるん
まゆるさくさく
うらたわんか
あゆるしし戸金
むねのひらこ
影たれおろし
はらりたるん
まゆるさくさく
うらたわんか
あゆるしし戸金
むねのひらこ
影たれおろし
はらりたるん

あゆるしし戸金
むねのひらこ
影たれおろし
はらりたるん
まゆるさくさく
うらたわんか
あゆるしし戸金
むねのひらこ
影たれおろし
はらりたるん
まゆるさくさく
うらたわんか
あゆるしし戸金
むねのひらこ
影たれおろし
はらりたるん

陣より中將のつとめを

大内へ相傳へしつとめ

いづれかあつてのれい

つとめあつてのれい

也信の信りあつてのれい

おのゝの信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

信りあつてのれい

これぞ神さしほのつとめ

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

にせらるゝおのゝあつてのれい

平東あゝと向の
西尺あちれ由ついで
とれたしこは古今集
物言もまゝ上りこ
まててとく一あ
のちあゝあつて魂せ
れあまゝいふあつり
んてしおれあつて
まじ上原集抄云或説
在中將二系友とて
ちんんちりこふ生
せりこまはあま
驍乃若凡乃つらにけ
りまはは法第十四
まゝとてとてとて

しあつてつりい
あまひらうけ
いしちりい
こまよちり
こまよちり
こまよちり

まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま

まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま
まゝのいふあま

夜も...
 寂しげな...
 ...
 ...
 ...

かくしの...
 ...
 ...
 ...
 ...

じと...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

じりーのらりり

まはあまのうた

しんをいさせり。今

はる乃船入春

時野のてん

甲日本紀十五仁賢記云

のいさげり

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

はらんす。あり

じりーのらりり

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

ちりーのらりり

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

まのうた

に瓶やしてかゝる会合の事。甲瓶山志の事。乙瓶山志の事。丙瓶山志の事。丁瓶山志の事。戊瓶山志の事。己瓶山志の事。庚瓶山志の事。辛瓶山志の事。壬瓶山志の事。癸瓶山志の事。甲瓶山志の事。乙瓶山志の事。丙瓶山志の事。丁瓶山志の事。戊瓶山志の事。己瓶山志の事。庚瓶山志の事。辛瓶山志の事。壬瓶山志の事。癸瓶山志の事。

新らしいあれね
甲 おれにおねいめさ
乙 ありあつた一奥列乃

ね
天橋ワ一本
ネやこのはらうら
とらねれはらうら

丙 ありあつた一奥列乃
乙 ありあつた一奥列乃

とらねれはらうら

丁 ありあつた一奥列乃
丙 ありあつた一奥列乃
乙 ありあつた一奥列乃
甲 ありあつた一奥列乃

人乃けはらうら
甲 ありあつた一奥列乃

乙 ありあつた一奥列乃
甲 ありあつた一奥列乃

志のお山志のびく
人乃こらら乃

丙 ありあつた一奥列乃
乙 ありあつた一奥列乃
甲 ありあつた一奥列乃

女乃さちあく
ららひああ

丁 ありあつた一奥列乃
丙 ありあつた一奥列乃
乙 ありあつた一奥列乃
甲 ありあつた一奥列乃

かきせん

乙 ありあつた一奥列乃
甲 ありあつた一奥列乃

カキ

甲 ありあつた一奥列乃

カキ

亦云いふたひ一いつの

極し葉草の

あるは女惟也

心く可と一依われ

若く下撰集れ

と何とごり

ともさ集りて

よと人さす

言甲あか

あるは葉草の

角のたの

甲向き

若草

れさの

どう

を

うつ

ま

る

お

それ

らん

白

あ

ら

な

月

や

私

こ

女

玄

母

ご

乃

臣

あ

惟

か

甲

いーあふぶある女あつらりおと

惟葉草

りあつらり女うよじんあつられた心

んこてあつらりもろつらつらとあつてお

とこれとくや

れさのよ白ふいづりて

えいこを

ふとこ

それさあよ白うら

お

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あつたかゝる上より
三巻のそらわれ三巻と
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい

あつたかゝる上より
三巻のそらわれ三巻と
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい

あつたかゝる上より
三巻のそらわれ三巻と
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい

あつたかゝる上より
三巻のそらわれ三巻と
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい
あつたかゝる上より
うらやまの心我を
いふことしつゆい

せんはづきやうもしよ
 ぐし。只中ねを伝て
 つるやあめの河をハ
 懸るやういづくし
 物持よあめ 師 あは
 あづきりあめしつきを
 一宵 うをこははる
 事一古治三三年と云
 赤川と重福の神事
 とも引とりの御事
 物を神りまら 柳
 弓あこしちり
 とらふふと一年
 ごとくあまこまの
 心持とあこまよ
 心ひかり年をいぬ
 とまらあめちくいと
 思うこいと
 子成こいといと物

とつひいづりくらわれむ
 一つ 一存 祥としてきしとたのた
 あづきりまら 十の今つかにあめ
 わせ かうらうらうらうら
 とつひいづりくらわれば
 あづきりひげいひねむ
 心ひかりまらあめ物を
 とつひいづりくらわれむ
後下いづりくらわれむ
 えといはけくらあめ
 よつかりうらあめ
 乃ち一うらあめ
 乃ちいづりくらわれむ人そめり

をれはきこひ
 思んてらうと
 あづきりまら
 心をを中し
 とつひ我を
 せうと
 この中を
 あづきりひげ
 よつかりまら
 縁よよあり
 あいひづり
 ともつひ
 乃切りまら
 あづきりまら
 母一は女
 集まら
 こえ
 があ
 林の野まら

わつひいづりくらわれむ
 ともつひいづりくらわれむ
 とつひいづりくらわれむ
 わつひいづりくらわれむ
 乃ち一うらあめ
 乃ちいづりくらわれむ人そめり

有朝の神

昔も我も此の世に
おられたるも人をか
神に祈りて一人を
たてられたぬれば
さういふにぬか
えりてかきいひま
海にわづろひて
我が身をまじりて
とていへども
いづれを海主の
神に祈りて
おんをた
うまはせよとて
まをすといひて
ふ我わづろひて
神に二葉の唐一葉
既けり一葉の唐
えりて一葉の唐
わづろひて

ありてぬかきいひ
いづれにありて
えりてぬかきいひ
わづろひて
いづれにありて
えりてぬかきいひ
わづろひて
いづれにありて
えりてぬかきいひ
わづろひて

らするともせり人
也師彼女を童車乃
ぬかきいひ
おんをた
うまはせよとて
まをすといひて
ふ我わづろひて
神に二葉の唐一葉
既けり一葉の唐
えりて一葉の唐
わづろひて

わづろひて
いづれにありて
えりてぬかきいひ
わづろひて
いづれにありて
えりてぬかきいひ
わづろひて
いづれにありて
えりてぬかきいひ
わづろひて

さらしやうとてしるわたりてはなほ
 心もさへいかりのふらふらと
 らのあしきつゝまじりては
 一よむいこいしなむとては
 けりぬのさぶらふとては
 のさしきとては
 うたへては
 秋風の吹きては
 けりぬとては
 流るる水とては
 あらざるに
 虫丸のあまはれは
 らさくは
 舟の舟をひいては
 足何とては
 はくもさき人をしては
 けりぬとては
 書身者念彼観音力還着於本人とあり

さらしやうとてしるわたりてはなほ
 心もさへいかりのふらふらと
 らのあしきつゝまじりては
 一よむいこいしなむとては
 けりぬのさぶらふとては
 のさしきとては
 うたへては
 秋風の吹きては
 けりぬとては
 流るる水とては
 あらざるに
 虫丸のあまはれは
 らさくは
 舟の舟をひいては
 足何とては
 はくもさき人をしては
 けりぬとては
 書身者念彼観音力還着於本人とあり

又ゆゑに修行し學ぶと云

くさんとして

いでつゝばりやうまいま

東子用教を講ず

さうがもの遊野へもあ

るをながかりては

まじりておぼしめし

こゝれ今昔をけし

を合れしよ

よむしよとけち

如烟盡火滅のまじり

合れしよとぞり年

へぬしよいはいま

まじりてあつた

まじりてあつた

まじりてあつた

まじりてあつた

まじりてあつた

まじりてあつた

まじりてあつた

まじりてあつた

まじりてあつた

まじりてあつた

まじりてあつた

いふまじりてあつた
まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

まじりてあつた
まじりてあつた

時比の女の心をむしりて
あづりた慈い懐の心は

心甲のこころむしけ
る儀様約の人の肩
途をたひののせぬ

あつとくさるる心
まきこし人 ウツコシ人 自家集
まき年 ハル年 常ノ知

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

あつとくさるる心
まき年 ハル年 常ノ知
あつとくさるる心

所しす方のけしき
をりま 惟去同

惟は撰まは秋の
都より入り居るを
こころやいづれのま
宵の程に思ふ秋草

やうよきうのれき
まじ周ちて竹枝の天の

やうよきうのれき
さくともく 蒸散水晴
よもいさこつてせは
これぞいさまの

平あふり。月が
トクともいさか
まじいさく

とまじいさく
いさく 甲友者

人のま 青 頭
ま他ま 信 お
一は四年ま

そあせりて

しり 撰 秋をよくと
くれが ま せい
あが ま び

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

年いさかの河
あは 只 ぼ

下 ま ぼ
月 ま ぼ

見 如 三秋号
世 の ちの人

世 の ちの人
世 の ちの人

世 の ちの人
世 の ちの人

世 の ちの人
世 の ちの人

世 の ちの人
世 の ちの人

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

あ ま せ
あ ま せ

とてしる事にして
四つにまゝぬらひ後の具
也。われん乃もすや
ゆいあわれれがりぬ
きれぬはれぬ
かぬぬらひぬらひ
さいあれぬの
ゆいあれぬも後
備せぬはれぬ
とてしる事にして
とてしる事にして

おのけつゝいふ
思一
たぬぬらひぬらひ
はぬらひぬらひ
とてしる事にして
いけんとて人を
ア
おのけつゝいふ
思一
たぬぬらひぬらひ
はぬらひぬらひ
とてしる事にして
いけんとて人を
ア

大正
三月
三日
印

